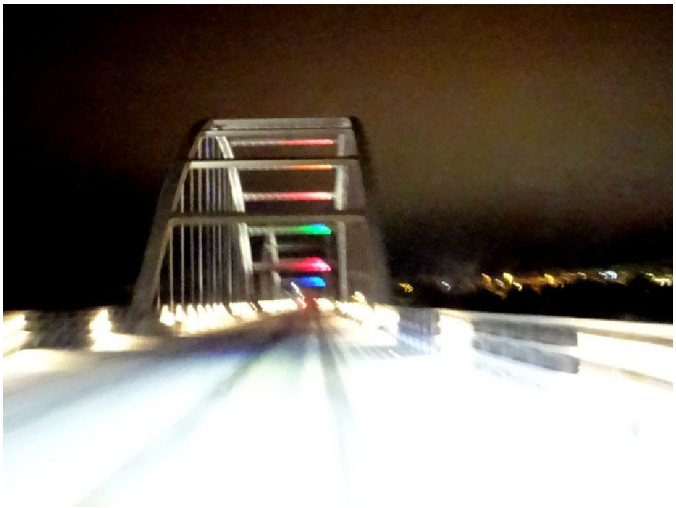
「日々の理科」（第 1271 号） 2017（H29）, 12, 29

北極圏旅行記 2017-2018 冬（４）

～12/27 北極圏でオーロラに遭遇～

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

ケミという街の郊外で、ボスニア湾沿いの広い国道に別れを告げ、トーネ川沿いの道をひたすら北上した。エーベトーネオーいう街で、フィンランドから対岸のスウェーデンへ抜ける橋がある。



これがトーネ川にかかる橋。何色にもライトアップされて、非常に美しかった。橋の真ん中が国境だが、国境ではパスポート検査も何もなく、東京から多摩川を越えて神奈川に着いたのと、何も変わらない。ロシアとの国境では、こう簡単にはいかないだろう。

橋を渡り切ると、「ここからスウェーデンですよ！」という標識がある。「SVERIGE」は、スウェーデン語でスウェーデンという意味で、「スヴァーリエ」と発音する。その下は「エーベトーネオー・コミューン」と書いてある。「KOMMUN」は「郡」の意味だ。「POLCIRKELLAND」は「北極圏の土地」の意味、「Norrsken Lodge」は「オーロラ・ロッジ」の意味。

国境を越えてからも、北へ向けてひたすら走り続け、午後７時に、やっと目的地の宿泊地に到着した。ヘルシンキからの道のりはちょうど 1000km、緯度では７度も北上した。まさしく地球規模の移動だった。

宿泊地の「ラップランド・スノー・キャビン」は、８月に旅行した時に１泊だけした。客室、キッチン、暖炉付きの居間などの設備が充実。オーナーさんも親切な方で、すっかり気に入ってしまい、冬の分もすぐに予約を入れておいたのだ。

スノー・キャビンのあるマスグンス村（キルナ・コミューン）は、スーパーもコンビニもない、淋しい村なので、日本からは食料を大量に持ち込んでおいた。淋しい分、夜空の暗さ、星空の美しさ、それに何よりもオーロラ観望適地としては、世界屈指の土地である。

キャビンの庭からもオーロラは見えそうだった。しかし、国道沿いなので街灯が邪魔をしていることがわかり、なるべく近いところに観測地を探すことにした。キャビンに到着して、休む間もなく、さっそくオーロラ観望に出かけることにした。

キャビンから北へ、ほんの数キロの場所に、国道沿いのPの標識を見つけた。針葉樹の森に囲まれて、オーロラが見える北側が開けた場所である。この日はよく晴れていたが、気温が-15℃で、アイス・フォグ（氷霧）が出ていた。上の写真は、そのアイス・フォグに遠くのトラックの灯火が反映したものだ。私は最初、これをオーロラと誤認してしまった。

しかし、10 分ほど待つと、本物のオーロラが出現した。オーロラの「出始め」は、このように緑一色の淡い虹のような姿をしている。観測した場所は北緯 67 度超の北極圏で、晴れていれば強弱は別として、常にこのようなオーロラが見えている。最初は言われなければ気付かないほどの淡い光芒である。

（３ページ目に拡大写真あり）

これは観測地から南側を眺めたところだ。この日は半月があってまだ沈んでいなかった。オーロラの光は月光よりもずっと弱いので、新月前後の晩のほうが良い。しかし、月光のおかげで、オーロラだけでなく、地上の風景も写されて、非常に情景的な写真になる。上の写真で面白いのは、オリオン座だ。画面真ん中に写っているが、南中高度が非常に低い。天球上、「天の赤道」に近いところにあるオリオン座は、高緯度地方では南中高度が低く、昇ってもすぐに沈んでしまう。逆に北極星はほぼ天頂に見え、こと座は周極星（一年中地平線下に沈まない恒星）となる。星座の見え方も日本とはちがって、面白い。

（３ページ目に拡大写真あり）

これは、観測地のPを南側から見たところ。道はほぼ真北を向いているので、彼方にオーロラが見える。この道は、夜間ほとんど車が通らないが、トラックや長距離バスが時々通る。通常の道端では非常に危険なので、必ずPの場所で安全に観測したい。

北極圏の地平線に低いオリオン座
スウェーデン・ノルボッテン州・マスグンス村
2017.12.27 / C.Tanaka

白鳥座、こと座とオーロラ
スウェーデン・ノルボッテン州・マスグンス村
2017.12.27 / C.Tanaka